

環境科学部

環境生態学科のこの一年

永淵 修

環境生態学科長

2014年3月、25名の卒業（第17期）を送り出し、あけて4月31名の新入生（第21期）を迎えた。毎年スイッチが切り替わり、春を迎えることができる大学とは、実におもしろいところだなと感じつつこの1年を振り返る。

最初に残念な報告をせねばならない。浜端先生が6月に志半ばにして他界されたことである。通夜、葬儀には全国で活躍されている多くの卒業生、在校生が参列していただき、浜端先生のお人柄だなと感じたものである。また、年度も押し迫った3月には4回生の玉田さんが不慮の事故で亡くなられた。この1年間に我々の学科から二人の尊い命が奪われたことは、本当に残念至極である。

人事では、田辺先生が10月1日付けで准教授に昇任され、堂満先生も年度が変わる4月には准教授に昇任される。現在の環境生態学科教員定数は、教授5、准教授5、助教4であるが、浜端先生の件、そして倉茂先生が新年度から理事に専念されことになり、現状では教授5（新年度で4）、准教授4（新年度で5）、助教4（新年度で3）となり、准教授の定数はやっと満たされることになったが、新たに教授と助教の定数をうめる必要に迫られている。現状では、定数不足のため教員の皆様には過負荷になっており、早急に新たな人事を立ち上げねばならない。女性教員の比率も教授・准教授では3割であるが、全体では2割である。今後、国の方針もあり、我が環境生態学科も嫌でも変化を余儀なくされることになるであろう。この変化が我が学科の飛躍となればこれに超したことはない。

学科の動向について、2010年にカリキュラム改正を行い、順調に成果をあげてきていると感じられるものもある。環境生態学演習もその一つである。また、その少し前より「人間探究学」において「教育ディベート」を取り入れているが、これもその良い例であろう。惜しむらくは、単発で終わっていることである。4年間通して継続していきたいものである。新カリキュラムになり科目名から中身の分からないものがあることが気になる。私に関連するものでも「集水域・・・」がいくつかあり、教員がよくわからないのに学生、特に受験生は何を学ぶのかわからないと思う。早急な対策が必要だと思う

がいかであろうか。

昨今の少子化問題に巻き込まれ我が学科もいかに志願者を増やすかに知恵をしぼり、入試科目の変更と志願者数関連等の入試関連のデータをいじりながら検討しているが、このようなことに教員のエネルギーを費やすこと自体教員のエネルギーを低下させ魅力のない学科へと落ちぶれていくものではと危惧するものである。我々教員一人一人がいかに魅力的であるかが学科の活性度につながり、それがお客様を呼ぶ秘訣ではないだろうか。

最後にもう一つ、最近の4年生大学は短大の様相を呈している。3年になると学生は就職活動主体の生活になる。つまり、学業は2年で修了と相成っている、それ以降も単位取得には血眼になっているが。外国人雇用を増やそうとしている企業が多く出てくる中で、これでは、近隣のアジア諸国の学生とは勝負にならない。我が学科は4年で就職する学生が多い。他大学の理科系の中では出色の大学院進学率の低さである。少なくとも早くから大学院に進学を決めておけば大学院博士課程前期の1年までは学業に専念できる。すなわち5年間は学業に専念できるわけである。将来の日本のために我々教員は、学生達に大学院に進学することを進めることも4年生大学の短大化を防ぐ道ではないだろうか。それには、進学のためのサポート体制等大学内の新たな規約作りも必要になるであろう。昨今の就活騒動を苦々しく思いつつ筆を置く。

環境政策・計画学科のこの一年

近藤 隆二郎

環境政策・計画学科長

4月に新入生42名を迎えた。募集区分別にみた内訳は推薦6、留学生0、一般前期24、一般後期12名である。また、前年6月に研究室に仮配属されていた57名のうち47名が本配属となった。7名が取得単位数の不足のため本配属とならなかった。6月中旬に、3回生36名と留年生5名の計41名が研究室へ仮配属となった。ただし、4回生（以上）5名が取得単位数の不足などの理由で未配属となっている。徐々に学年の横のつながりが希薄化しているためか、個別に連絡相談を必要とするケースも増えているように思える。

7月3日に、学科としてのゼミ対抗スポーツ大会（バレーボール）が開催された。ゼミ対抗の球技大会は学科恒例行事となりつつある。学年を超えて学